# 令和７年度　特別の教育課程の実施状況等について

| 宮城県 | | |
|---|---|---|
| 学　校　名 | 管理機関名 | 設置者の別 |
| 宮城県仙台二華中学校・高等学校 | 宮城県教育委員会 | 公立 |

## １．特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

| 学　校　名 | 自己評価結果の公表 | 学校関係者評価結果の公表 |
|---|---|---|
| 宮城県仙台二華中学校・高等学校 | https://nika.myswan.ed.jp/tokubetsukyoikukatei | |

## ２．特別の教育課程の内容

### （１）特別の教育課程の概要

平成 26 年度から５年間、文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール(SGH)指定校に認定され、課題研究や教育課程等の研究に取り組んできた。SGH 指定期間が終了した平成 31 年度以降も、学校設定教科「グローバルスタディ課題研究」を新設し、SGH 指定時に実施していた特別の教育課程（学校設定教科「SGH 課題研究」）の継続教科とすることで、SGH 事業で取り組んできた課題研究の更なる深化を図るものである。

学校設定教科「グローバルスタディ課題研究」設置理由：

SGH の指定で得た知識・手法を生かし、「世界の水問題の解決」に関する課題研究を行うことで、社会の問題に対する関心と、深い教養及び問題解決能力等の国際的素養を身に付けるため。

学校設定科目：

高校１年次「グローバルスタディ課題研究Ⅰ」（２単位）

※「総合的な探究の時間」（２単位）の代替科目

高校２年次「グローバルスタディ課題研究Ⅱ」（３単位）

※「総合的な探究の時間」（１単位）と「情報Ⅰ」（２単位）の代替科目

高校３年次「グローバルスタディ課題研究Ⅲ」（２単位）

※「英語表現Ⅱ（４単位)」(本校では２年次２単位，３年次２単位の分割履修）の代替科目（３年次の２単位分）

※２年次で「グローバルスタディ課題研究Ⅱ」を選択した生徒が３年次で選択可

**高校１年次「グローバルスタディ課題研究Ⅰ」**

目標：広瀬川フィールドワークや北上川フィールドワークや模擬国連活動など、日本や世界が直面する深　　刻な社会問題の解決に正面から取り組む

活動を通して、現代社会を生きる地球市民としての「適切な世界観」を身に付け、問題の原因や構造などの「本質を見抜く力」を育成する。

**高校２年次「グローバルスタディ課題研究Ⅱ」**

目標：主としてメコン川／東南アジアに生活する人々の立場に立ってどのような状態が理想的かを研究し、水問題とその解決のプロセスを考えることをとおして、そこに生きる人々に「共感する力」と、理想的な状態を具現化する「構想力」を育成することに主眼を置く。また、この科目は本特例により「社会と情報」の代替科目でもあるので、必要な情報の収集の仕方、得られた情報をもとに正しく活用する力等も併せて身に付ける。

**高校３学年「グローバルスタディ課題研究Ⅲ」**

目標：自ら考えた「水問題」の解決策について、国内外の学会等で発表し、専門家から指導助言等を得ることにより、より現実味のある案に改善する。そして、説得力のある論文を作成し、カンボジアにある中学校やNPO などに提案する。また、この一連の活動を通し、自分の考えや立場を「相対化する力」を育成する。

**（２）学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性**

開校当初から取り組んできた課題研究を基盤として SGH 指定校に認定されることにより、外部人材をさらに活用することが可能となり、生徒の研究内容等についても深化している。課題研究への取組は、国際理解教育とともに本校の特色ある教育活動の１つでもある。SGH 指定期間に実施していた特別の教育課程における教育効果を、当該期間が終了した平成 31 年４月以降も継続させるために学校設定教科「グローバルスタディ課題研究」を後継教科として設置して、SGH 事業で取り組んできた課題研究の更なる深化を図るために、本特例を編成し教育を実施する必要がある。

**３．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果**

**（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況**

- **計画通り実施できている**
- **一部，計画通り実施できていない**
- **ほとんど計画通り実施できていない**

**（２）実施状況に関する特記事項**

コロナ禍において実施を見送ったり、規模を縮小して実施したりしていた各種取組については、新型コロナウイルス感染症が５類感染症へ移行したことに伴い、本来の規模で実施することができた。さらに、コロナ禍に対応するために試行錯誤したさまざまな工夫やオンライン会議等のノウハウも併用し、これまで以上に充実したプログラムを実施することができた。

（３）保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

（・実施している
・実施していない）

＜特記事項＞

高校１年次で令和５年度から実施している「広瀬川フィールドワーク」では、講話や体験を通して学校近郊の水に関する歴史や人々の営みについて学んだ。また「北上川フィールドワーク」は、令和３年度から野蒜海岸・州崎湿地でフィールドワークを実施しており、令和７年度も現地協力団体の支援のもと、有意義な学習活動を実施することができた。当該団体の協力をいただきながら当該方面に関する研究を継続している生徒は、２月に現地で研究発表を行い多くの方々から指導助言をいただいた。また、高校２年次においては、今後ますます深刻化することが予想される水問題について、近隣の小学校を訪問して啓発活動を行った。

研究の成果については、生徒それぞれの研究分野に合致した学会やシンポジウムに参加し発表した。具体的には、高校３年次の生徒は８月にシンガポールで開催されたAsia Oceania Geosciences Society(AOGS)や日本植物学会、日本地理学会などの全国規模の学会で、高校２年次の生徒は日本水環境学会東北支部や土木学会東北支部などの支部での発表を中心に参加し、多くの聴衆の前で堂々と発表を行った。研究内容も、全国規模のシンポジウムである高校生国際シンポジウムでは化学・環境部門のスライド発表で最優秀賞を受賞、日本水環境学会や土木学会東北支部での発表でも研究奨励賞を受賞するなど高く評価されている。また、２月には校内で課題研究発表会を開催し、中学校１年生から高校２年次生までの生徒全員が縦割り形式でグループを作り、研究の成果を発表した。保護者の方々にも参観していただき、貴重な意見等を頂戴した。

これらの活動は、特別の教育課程の編成により実施した「グローバルスタディ課題研究」等の成果を生徒自らが発表することで、社会問題への興味・関心等を他者へ感化する活動と捉えており、今後も多方面において同様の取組を実施したいと考えている。

## ４．　実施の効果及び課題

### （１）特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本校の校訓は「進取創造」と「至誠貢献」であり、教育方針は「豊かな心と高い知性をもち、進取の気風と創造性にあふれ、社会のリーダーとして、わが国や世界の発展に貢献できる人間を育成する」である。また教育目標は以下のとおりである。

「豊かで高い知性を養い、主体的・創造的に学ぶ生徒の育成」

「礼節と品性を尊び、心豊かで包容力をもつ個性あふれる生徒の育成」

「真理と正義を愛し、未来を切り拓き世界に貢献できる生徒の育成」

「健やかな心身を育み、国際社会の中でたくましく生き抜く生徒の育成」

本校の特別の教育課程は、校訓・教育方針・教育目標の達成に向けて編成され実施されている。また、これからの時代は、言葉や価値観が異なっていても、世界の多くの人々を理解し堂々と渡り合える人、適切な世界観をもち自己主張を的確に行える人、健康で豊かな知性と教養をもつ人などが、日本や世界の発展と平和のために行動する必要があると考える。本校では、特別の教育課程の編成を通して、以下の５つの資質・能力を育成することも目指している。

１）現代社会を生きる地球市民としての「適切な世界観」
２）問題の原因や構造の「本質を見抜く力」
３）そこに生きる人々の気持ちを受け入れることのできる「共感する力」
４）人間や社会の理想的なあるべき姿を具現化する「構想力」
５）多様な人びとの意見を聞き、自分の考えや立場を「相対化する力」

**（２）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係**

学校設定教科「グローバルスタディ課題研究」を設置し、各課題研究科目を実施したことにより、各教科・科目等の学びと各課題研究における学びが生徒の中で統合され、学習内容及び活動が深化している。具体的には、各教科・科目等で育成する知識・技能が、各課題研究科目の学習により、生徒にとって生きて働くものとなり、物事を実際的な課題として捉えながら、グループ等での話し合いといった言語活動を行い、培った思考力・判断力・表現力等を活用して課題解決を図ることができるようになってきている。

**５．課題の改善のための取組の方向性**

本校には令和３年度から国際バカロレア（IB）類型が導入されており、探究活動において、普通類型の生徒と IB 類型の生徒が協働して研究を行うことに加え、令和５年度は、IB 類型の生徒が初めてメコン川フィールドワークや学会発表に参加した。それらの活動の中で、普通類型の生徒と IB 類型の生徒の着眼点の違いなどに気づく機会もあり、生徒間でその理解を深め合うことができた。今後も IB の「学習の方法」、「指導の方法」の理解を深め、探究学習に取り入れていきたい。

課題としては、これまでの研究成果やフィールドワークの情報など研究データが膨大になってきており、生徒が必要な情報を見つけ、アクセスすることが難しい状況が生まれている。また、近年急速に発展してきた生成ＡＩを探究活動に一部活用している生徒も見受けられる一方、まったく使用していない生徒もおり、生成ＡＩを探究活動にどう生かすか、その指導が必要になっている。生成ＡＩを適切に活用できれば、膨大なデータの中から目的のデータを探し出し、探究に生かしてさらに発展させていくことも可能であるため、次年度は生成ＡＩのガイダンス、「課題研究ガイドブック」のさらなる充実とともに、探究活動における適切な使い方について指導を行っていく。